

『「馳走」という言葉は素敵な言葉ですね。UTOは「ニットの「馳走」をお届けします。』

体を維持する為の栄養価や食料に対して、「馳走」とは食材に美味しさや愛情を味付けして、食べる喜びを提供するものでしょう。

UTOのニットも、吟味したニットの素材に夢とこだわりを味付けして、装うことの喜びや幸せという「ニットの「馳走」」をお届けすることだと思っています。

構造改革、リストラクチャリング。不景気で苦しむ日本は長いトンネルの中。

今まで、『より安く・より大量』は日本の大きな成功要因でした。

『付加価値、差別化、夢』といいながらも、これまでの成功体験が一番の仇になっているとは。

何より『やってみる』しか方法はなさそうです。でも経験の無いことをやることは勇気が要りますね。

【安いニット】

昨今、『もっと安い商品を』という声や、あたかも価格が全てと言ったようなニュースも聞きます。果たしてそうなのでしょうか？私の場合、興味の無いもの、優先順位の低いものは安いに越したことはないけど、それは自分の好きなもの、興味のあるものを得る為の苦肉の策。

お洒落に興味のある人は商品の価値を認めてくれるはず。『自信を持つ』と自分に言い聞かせながら毎日仕事しています。

【明るく楽しい春のニット】

今、ハマトラをはじめ明るい上品服が見直されています。

UTOはモロのトラッドではありませんが、明るい上品服なら絶対に自信あります。『いい物を長く、知的で明るいニット作り』がテーマですから。

今年の春夏はニットならではの色彩での遊びです。顔色や肌を綺麗に見せる濁りのない鮮やかな色をこころがけました。UTOは基本的な無地がメインですが、今年

綿カシミア・アンサンブル

No. 7101 ¥13,000.- ランカレツ
No. 7104 ¥21,000.- ヴァン・ダ・グレン



UTOがこだわったカシミアの柔らかさと綿の爽やかさが調和した素材です。素肌に優しい繊細な編地が着ている人を幸せな気分してくれます。春が来るたびに大活躍してくれる、一着は持っていたいお勧め商品です。

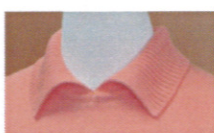
大人のボーダーシリーズ

No. 5214 ¥14,000.- 半袖ハイネック
No. 5213 ¥16,000.- 長袖ハイネック



今年のメインカラーの白に今ブレイク中のボーダーです。発色と肌触りに優れたスーピマ綿を使用。ありそうでなかなかお目にかかれない大人のボーダー。知的で上品な配色を楽しんで頂けます。

この春夏は衿に注目



* ニットならではの衿 *

鮮やかカラーにエレガントにキュートにスポーティーに。この春夏は衿の遊びで楽しんでください。



クリスマスローズ

【南青山界限】 骨董通りお昼事情

お勧め・家庭中華料理 『ふーみん』

落ち着いた大人のレストランや小洒落たイタリアンレストラン、巨匠のお店等、この界限のレストランはよくテレビや雑誌に紹介されていますが、毎日の事そんな豪華なお昼は私にはとんと無縁です。もっとも、食にこだわらる人ならいろんな店や手ごろな店を知っているんじゃないでしょうか。

ここら辺も多分に漏れず十二時になるとほとんどの店の席がすぐ埋まってしまいます。しかし朝食は八時ごろ必ず開いているので十二時では全然お腹が空きません。本日は二時ごろが一番良いと思うんですがそれより遅くなってしまつたらランチタイムが終わってしまうのでいつもは一時ごろ。

一番近いのが通りの向こうにあるお弁当屋さん。あつあつのご飯が結構いけるんですがお弁当は部屋に匂いがこもってしまうのと、気分転換に外を歩きたいので外で食べるのが多くなってしまいます。

隣の隣のビルに二十四時間営業のファミリール

レストランのジョナサンがあるります。

『青山にどうして?』と思います。結構利用客があるようです。

歳のせいかもしれないが馴染めず一年半経って四五回しか行っていません。

週に一度は行くのが、お花の小原流会館の地下にある家庭中華料理の『ふーみん』です。

ここは一時過ぎに行っても必ず待つぐらい混んでいます。何を食べても美味しいと思つています。料金も味やグレードの割には格安感があります。

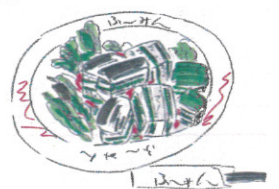
行くときは殆ど一人なのでカウンター席に案内されることが多いんですが、ここから丸見えの厨房ではそれこそ戦争状態の料理人さんの中にひときわ小柄なオーナーの斎さんが不釣り合いなほどの大きな中華鍋を振っている姿を眺めるのも楽しみです。料理の合間に店内に目を配ってお客様に挨拶される姿は、時々テレビで見受けるいかに優しそうなあの斎ふーみんさんです。

入り口にはいつも新鮮な花が活けられ、サービス係りの洗練とした動きや言葉使いもここら辺りではびかち。

残念ながら四種類ある日替わりのランチは一時過ぎはどれか終了している程の人数ですが、定番のシンプル中華風ふーみんソバ八四〇円はお気に入りです。

お昼は、『〇〇でいいや』で決めてしまいがちですが、何を食おうかの次に頭に浮かぶのがカウンターなどがある一人でも入りやすい店を自然に探しているのはちょっと寂しい。

誰か一緒に歩く人がある時は店の選択肢がぐっと広がるんですが。



* ニットの話 *

南蛮渡来の女里弥寿（メリヤス）

突然ですが『莫大小』をご存知ですか？
これをメリヤスと読める人は業界人か、私より年配の方ではないでしょうか？

二十年以上も前、私がニット屋になりたてのころです。
ニット製品を作っている会社の社長さんを紹介され、
〇〇莫大小株式会社 代表取締役という名刺をもらったとき『莫大小』（バクダイショウ）ってなんだ！とビックリした思いがあります。

今でも〇〇メリヤスというニット製造の会社は多くあります。どうも私の場合、メリヤスと聞くとラクダのシャツに代表される地味な下着を思い浮かべてしまいます。

ニットのことをメリヤスと呼ぶのもかなり古風な呼び方ですが、さすがに莫大小は今ではあまり使われない表記です。
メリヤスとはポルトガル語でメリヤス、スペイン語でメデアスと言った靴下のことだそうなんです。
ニットが日本に伝わった時の詳しい事情は解っていないようですが、メリヤスと聴いた人が『女里安』とか『女里弥寿』と当て字をしたんでしょう。

日本に西洋人が現れたのが一五四三年。ポルトガル船が鹿児島種子島に漂着した、いわゆる鉄砲伝来です。

それ以後一六三九年に徳川幕府が鎖国をするまで度々ポルトガル船が訪れ、一五四九年にはスペインのイエズス会宣教師のフランシスコ・ザビエル等が日本を訪れていますのでその頃に伝わったものでしょう。と言うことは伝来者はポルトガル人かスペイン人でしょう。

宣教師のロイス・フロイスが織田信長にヨーロッパのいろんな産物を献上していたようですから、その中にメリヤスというニットの靴下が入っていたかもしれませんね。



UTOは図書館のイメージ

その頃の風俗を描いた南蛮屏風絵の中に描かれた西洋人。ニッカボッカのようなパンツの下から色とりどりの長靴下が見えます。これはまさにメリヤスといわれるニットの靴下でしょう。

鎖国の間も長崎の出島では靴下が編まれていたそうで、長崎土産としてもはやされ、江戸時代末期にはかなり普及し武士の内職として盛んに編まれていたそうです。

貧乏武士の内職は傘の張替えや代書屋というイメージがあるんですが、ちよんまげ姿のお武家さんが編み棒でニットの靴下を編んでいるのを想像するだけで笑ってしまいます。

その頃の文獻に『めりやす』というものは、のびちみありて、人の腕の大小あれど、いづれもよくあうものなり。さらば大小と莫（な）く合うという義にあらべきや」と記述があるそうなんです。
ニットの特性を表した莫大小をクイズみたいにメリヤスと読ませてしまおう。日本語って面白いですね。

幕末の龍児で、袴を履いて靴をはいていた坂本竜馬の写実があります。新らしい物好きだった電馬は、きつとあの靴の中はメリヤスの靴下を履いていたんだろうなあと想像すると、ちよんと嬉しくなります。

信長も竜馬もメリヤスをはいていただろうと言うのは私の希望的観測ですが、あの天下の副將軍の水戸光圀が靴下を履いていたのは事実のようで、七足の靴下が遺品として発見されています。さすが黄門様、七足の靴下のうち三足は絹製の長靴下だったそうです。

忙中暇話・ニット屋のたわごと

八重桜 讀 燦



小金井に住んでいて、『この街に住んでいて良かったな』と思える一番の処が小金井公園です。

あの染井吉野の喧騒から約二週間後、染井吉野はすっかり葉桜になり普段の静かな公園に戻り、訪れる人が常連さん達に戻ると、公園の西の一角にある桜の園の八重桜が開き始めます。

桜の名所は日本中にあるでしょう。この付近では国立の大学通りや桜通り、狭山湖など地元自慢の名所がありますが、八重桜がこんなに見事なところは知りません。

おらが桜が一番と鼻息の引き倒しの感も無きにもありませんが、小金井公園の八重桜の素晴らしさを見直します。八重桜は一本でかなりの存在感があります。また開花時期が他の木々も芽吹いた頃で新緑とのハーモニーが美しさを一層際立たせます。

淡い桜とクスノキの褐色がかかった淡い緑、それよりちょっと深い緑のケヤキ、透明感のあるカエデの黄緑、シルバークラッパの黄緑。そして陽の当たった鮮やかな緑と葉陰の緑、その上風の動きにも微妙に変化します。自然の持つアート感覚には人間がいくつも頑張っても勝てません。

また、八重桜は晴れても曇ってもいいですね。小雨の中にくぐる八重桜こそ妖艶な感じがします。花びらが揺る揺るに下がって咲く様子が大仰で品が無いという人もいますが、僕は群れになった染井吉野より好きです。

二重の八重桜は桃白、太白、など雅な名前をもった花達。咲き方や色もそれぞれ特徴があり、芽吹きと一緒にたたり開花の時期もまちまちで、こつちが終つたら向こうという具合に長い期間楽しませてくれます。

さすがに香る駿河台という名前の花。公園の隅にひっそり咲いているこの花を知っている人は必ず立ち止まって香りを感じていきます。

染井吉野の喧騒と比べてしまふのか、訪れる人達も一応に寧ろ静かな中にほの温かさを秘めている様子です。

満開の木に近寄って見上げると、大きな滝を下から見上げたような、まるで花の洪水が流れ落ちている滝の中に淡い桜色と空のコントラスト、はねた枝の花は桜色のしじきが空に散っているように見えます。

春爛漫の至福の時間です。

世界のホテルを旅する (三) メキシコシティ・メキシコ
マジェスティック ホテル

メキシコシティの街を思い浮かべると、乾燥した埃っぽい高地の街をフォルクスワーゲンの黄色いカブトムシのタクシーがやたらとクラクションを鳴らしながら走る街。そして、物売りの呼び声が石畳の街に反射する賑やかな街。という光景が浮かびます。

メキシコシティの中心といわれるのが、ソカロという木が一本もない石畳の広場です。正面はカテドラル（大聖堂）、右側が大統領官邸。広場の真ん中に巨大なメキシコの国旗が掲揚され、いかにも中心！という感じがします。

マジェスティック ホテルは、クラシックな造りで、入って四階まで吹き抜ける天井がとってもいい雰囲気を作っています。年代物のエレベーターがやけにゆっくりです。最上階のレストランからのソカロが一望に見渡せる絶好のロケーションです。ここから広場を見ているとメキシコの社会が凝縮されているように見えます。

三泊した最終日の朝、レストランに行くのと眼下の広場で祭りのような準備が整っています。広場を囲む建物にはスペイン語でスローガンが書かれた巨大な垂れ幕がはかっています。何が始まるかわくわくしながら特等席の窓際で朝食を摂っていると、軍服やいかにもお偉方風の紳士、二十ぐらいがテーブルを占領してしまいました。ドレスの婦人もいます。一般のお客は私を含めても三テーブル。

パレードが始まり方々から続々と人々が集まって来ます。ブラカード、旗、鳴り物ありのもの凄いです。ウエイトレスに聴いて今日はメーデーと気づきました。サリナス大統領が颯爽と大統領官邸からお出ましです。周りの建物の屋上の要所要所を銃で武装した兵隊が警戒しています。一瞬、ゴルゴサティーンの劇画のシーンが思い浮かびます。

式典もそろそろ終わりがかと思えた頃、食事をしていた紳士淑女全員がレストランのテラスに整列して手を振り出しました。『待つてました！』とばかり備え付けの巨大な扇風機のような機械から赤白緑のメキシコ国旗カラーの紙ふぶきが撒かれます。広場の全員が喚声を上げこつちを注目しているんです。

まさに特等席でした。それにしても、お国のお偉方がメーデーのクライマックスで手を振っている横の丸見えのレストランの窓側で一人食事している東洋人。

下の広場から見ているとなんと違和感のある光景だったでしょう。

